

にも入り易く親しみ易い歌学啓蒙の書とするために、年少読者と同世代の幼童の歌を多数配置する方法を執ったであろう」と推論される。貫之がおのれを幼童の立場に仮装しようとした時、あるいは年少初心の者に入り易く親しみ易い書を作ろうとした時、実は彼自身が変わりて童心への回帰を果たしたといえる。そしてその時、これらの歌が「稚拙さ」から「素朴な美」へと価値を顛倒させる。

四、童心回帰

土佐日記、一月二十一日に次の記事がある。

風も吹かず、よき日いで来て、漕ぎゆく。このあひだに、使はれむとしてつきくる童あり。それがうたふ舟歌、

なほこそ

国の方は見やらるれ

わがちははありとしおもへば

かえらや

船が京に近づけば近づくほど、人々は心を躍らせているのに、この機会に都へ出て奉公しようという使われの子どもにとっては、刻々故郷を遠ざかる思いがつのるばかりである。

なんといったってよう

おいらの顔はくの方に向いちゃう

おらのちははは そっちにおるんだもん

かえろかな

その子の望郷の思いは、直ちに貫之の幼女追慕の思いと重なる。土佐日記において、貫之の亡児哀傷の思いは、

童心への回帰

素朴な歌への転換

そして、俳諧精神への指向

といった三つの方向へと発展した。

土佐日記には父性に立つ児童文学の原型がある。

資料

萬葉集

日本文学古典大系

古今和歌集

同

土佐日記

日本文学古典全書

土佐日記全注釈

萩谷 朴

日本児童生活史

桜井庄太郎

日本子どもの歴史

久木幸男編

大伴 旅人・山上 憶良

高木市之助

大伴 家持

山本 健吉

紀 貫之

大岡 信

☆文中の和歌の表記は主として「日本文学古典大系」に従った

かえりたい

などよむであらうか。

③の歌、これも「いふかひなきものいへるには、いとつかはし」と自ら認めているが、もはや童心を誘掖するといった域をこえて、貫之はおのずから童心への回帰を果たしているかのように思われる。

萩谷朴氏「土佐日記全注釈」の中の口語訳をお借りすると、

「立てば立つ るればるる……」の歌、

(風が立てば波が立ち、風が坐れば波もまた坐る。それじゃ、風と波とは仲好しお友達なのかしらね。)

④の歌、「漕ぎてゆく舟にて見れば……」

(漕いでゆくお船の上でみていたら、遠くのお山もいっしょに動いているのに、お山の松の木さん気がつかないのかい。)

貫之の作も、また萩谷氏の口語訳も、童心の清純さ、単純さに添いつつ、そこに容易ならぬ文芸的技巧をも潜ませていることを見逃してはなるまい。

さて、土佐日記に対する後世の評判は、必ずしもよくない。そのわけは、これが「伊勢物語」のごとく奔放な愛を語らず、後続の女流の日記文学のような繊細な文体を持たなかったからだと言えなからうか。

土佐日記の文体は、これが古今和歌集真名序の作者とは思えぬほど異質である。つとめて流暢さと豊麗さを避けて、簡素な乾燥度のない文体をつくりあげているようである。

たとえば、

まして女は、舟底にかしらをつきあてて音のみぞ泣く。

(一・九)

今日いくか、はつか・みそかと数ふれば、指もそこなはれぬべし。いとわびし。夜はいも寝ず。

(一・二〇)

日一日風やまず。爪弾きして寝ぬ。

(一・二七)

「眼もこそ二つあれ、ただ一つある鏡をたいまつる」とて、海にうちはめつれば口惜し。

(二・五)

聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれ破れたる、家に、預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり

(二・一六)

など、京にいての「歌合せ」や「屏風歌」の歌が、類型的だったのを埋め合わせるかのように、日記の文は生活的、个性的である。しかもそれは貫之たちが創成した古今集風のいわゆる「たをやめぶり」とは逆の方向なのである。

小西甚一博士は、その逆転を、俳諧性への指向という点で評価しておられる。

「彼の思想は、すこし変わってくる。そこに深い人間的円熟が観られる。どう変わったか。ひとくちに言ふと、雅に包まれていたゐる俗が、雅を破って、俗なる姿をあらはしたといふことである。換言すれば、俳諧精神が誕生したのである。」——土佐日記全解——という風に。

土佐日記の中のいくつかの和歌——先の幼童少女の歌を含めて新作歌五十六首、それらのほとんどが、貫之の作としてはあまりにも平凡、稚拙という指摘もある。萩谷朴氏は、「何故に貫之が、幼童の立場を仮装してまで、これらの稚拙な歌をこの作品の中に織り込まねばならなかったのかと考える時、それは直ちに、この作品を、年少初心の者

なる」といふことを思ひいでて、人のよめる、

世のなかに思ひやれども子を恋ふる思ひにまさる思ひなきかな
といひつつなむ。
(二月二十一日)

この「世のなかに」の歌は憶良の「思子等歌」と対応する。

亡児哀傷の思ひは、少年少女への和歌の手引、並びに、童心を誘い
出し、童心に訴えて興味を喚起するといった方向へ発展する。

二月五日、京はま近となる。

「船とくこげ、日のよきに」

ともよほせば、かちとり、舟子どもにいはいく、

「み船より仰せたぶなり 朝北あさきたのいで来ぬ先に綱手はや曳け」

といふ。このことばの歌のやうなるは、かちとりのおのづからの
ことばなり。かちとりは、うったへに、われ歌のやうなること言
ふとにもあらず。聞く人の、

「あやしく。歌めきても言ひつるかな」

とて、書き出だせれば、げに三十文字あまりなりけり。

(二月五日)

船頭が水夫たちにむかって叫んだ言葉が自然に短歌の音数律にかな
ったというこの話は、短歌の定型性が自然の声に添ってできたものだ
という本質論であると同時に、少年少女の興味にもかなうものといえ
よう。

土佐日記の中で、幼童が詠んだことになっている和歌を一覧にする
と次のようである。

作者

作品・日づけ

①ある人のこの

○ゆく人も とまるも袖のなみだ川 みぎ

わらは はのみこそ ぬれまさりけれ (一月七日)

②をむなわらは ○まことにて 名に聞くところ 羽根ならば

③めのわらは 翔ぶが如くに 都へもがな (一月十一日)

○立てば立つ るればまたる 吹く風と 波

とは思ふどち にやあらむ (一月十五日)

④とし九つばかり ○漕ぎてゆく 舟にてみれば あしびきの 山

なる男のわらは さへ行くを 松は知らずや (二月二十二日)

⑤ある女のわらは ○わたつみの ちぶりの神に たむけする ぬ

さの追風 止まず吹かなむ (二月二十六日)

⑥ある女のわらは ○祈りくる 風間かまざと思ふをあやなくとも かも

めさへだに 波と見ゆらむ (二月五日)

この六首のうち、①は、作中人物をして、「かくはいふものか。う
つくしければにやあらむ、いとおもはずなり」と褒めさせているが、
幼童に仮託するには技巧に過ぎるところがある。②③④の歌は、稚拙
といえはそれまでであるが、こういう作こそを明快、素朴、純真とい
わねばならず、その清新さをこそおとなは学ぶべきであろう。作者は
貫之とみなければならぬが、このとき貫之は幼童の心を学んだといわ
ばいえよう。

②の歌、現代のこどもならば、

はね

いい名だな

その名のとおり羽根ならば

羽根にのってとんでいきたい

とんで みやこへ

期に、遠隔の地に遥任していることである。

貫之は土佐守の任を終えて京へ帰るとき、あたかも億良のひそみにならうかのように、「子らを思ふ心」に心を傾斜させた。その結晶が土佐日記である。土佐日記は、京にいる貫之の家の子弟への和歌の入門書として書かれたものであり、それが当時の官界に生きる生活のただでだったという推測もあるが、そういう外的な動機をこえたものが、貫之の心の中にうずまいていたのではなからうか。

現代の史家から、「どうひいきめにみても、かれのふるまいは期間的である。そうしてこういう類の和歌は、その意味で芸術的というほかないと思ふ」——北山茂夫「日本の歴史」——などという批評を受けねばならない京での生活を、あの貫之が、四年半に及ぶ土佐での日々に、五十五日も要した海路の日々に、自ら省ることがなかったとだれがいえようか。

京と土佐

公と褻、雅と俗

おとなとこども

漢語とやまことば

などという相対立する両極の中をどう生きるかに思いまどったのではないか。

をとこもすなる日記といふものを、をむなもしてみむとて、するなり

という冒頭の一文も、今さらの仮構の宣言でもなく擬装臙化でもなく、実は、七十歳に達せんとしながらも精神的に彷徨せずにはおれない貫之の「思想」がこうした文体をよびこんだのであると、思わずに

いられない。そして、そうした苦闘の救い主はだれであったか。それは、「こども」であった。

土佐日記の末尾の一文は、冒頭のそれと共に重要である。

おもひいでぬことなく、おもひ恋ひしきがうちに、この家にて生まれし女子をなの、もろともにかへらねば、いかがは悲しき……またかくなむ、

見しひとの松のちとせに見ましかば遠く悲しき別れせましや
忘れがたく、口惜しきことおほかれど、え盡くさず。とまれかう
まれ、とく破りてむ。

京で生れ、土佐につれていき、そして土佐でなくなったという幻のような「をんなご」、それが貫之の救いの主であった。

文献によると、貫之は在任中、孤児を養育したという一項がある。事実とすれば、「幻の幼女」のイメージもよりふくらみを持つことになる。

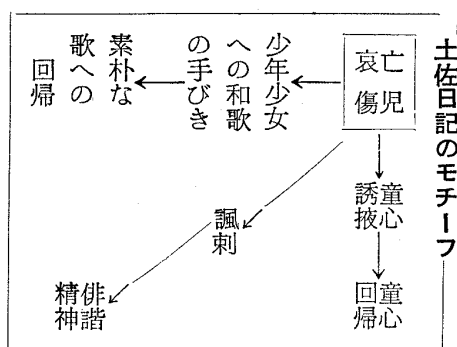
土佐日記執筆の内的な動機ならびに、土佐日記の主題への発展的な経路を图示すれば次のようにならうか。

中心テーマ、亡児哀傷の思いは、作
中方方面に点在させているが、一月十一
日、船は今の室戸岬に向かって走って
いる、その時の歌、

今日はまだ母の悲しがらるるこ

とは。下りし時の人の数たらねば、

古歌に、「数は足らでぞ帰るべら



つたらずでがでるもの(意訳)

現代の小学生の書くいわゆる児童詩に、これと同じ発想のものがある。

かぜに なって

かぜに なったら

かあちゃん

かせいで (あつとちへいって)

あせ ひっこめて やんだ

(すつと)

うんと (はたらくことができる) かせがれつぞい

小一 あじまさお(福島県)

東歌だからというわけではなく、巧緻繊細といわれる古今集の歌一般が、その凝った衣裳の中味のほどは意外に素朴で純真なことに気づかざるを得ない。

兼好法師が徒然草で、

貫之が「糸による物ならなくに」といへるは、古今集の中の歌屑

とかや言ひ伝へたれど……

といったその歌は、

東へまかりける時、道にてよめる

貫之

糸によるものならなくに別れ路の心ぼそくもおもはゆるかな

415

であるが、これを口語化すると、

あの 細い

糸でもないのに

きみと 別れて 行く道の

こころぼそいこと

心細いこと

とでもなろうか。音数律を外してみると、その内容のなんと子供じみていることか。それをさして歌屑といたのであろうか。兼好も「この歌に限りてかくいひたてられたるも知り難し」と言っているが、実はこの素朴さがおもしろいと思う考えも大いにあり得る。貫之の代表作と言われている巧緻なものよりこの方がいいのではないか。

正岡子規によって「駄洒落にて候」と罵倒された次の歌、

春、歌合せさせ給ふに、歌一つ奉れと

仰せられしに

貫之

桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける

(亭子院歌合)

これを口語化すると、

桜が散るよ

桜の木を吹きぬける風は

春だもの、もう寒くはないんだ。

そこを、そら、雪がこんなに降ってくる。

空の知らない、花の雪が――。

というぐあいになろうか。幼時のアニミズムを脱した上の第二次のアニミズムは、歌人と児童とが共有するものというべきであろうか。

三、土佐日記のなかの幼童の歌

憶良、旅人、家持、そして紀貫之、これら萬葉から古今へかけての歌人の生涯に共通する一点は、その誰もが、その生涯の最も重要な時

古今和歌集中の人称に関する語彙

人	234	
人間	というもの	12	
不特定の人	(人々)	50	
愛する人	(夫妻)	99	
特定の人		56	
歌をおくる相手		8	
自分自身		9	
われ	184	
わが			
きみ	68	
たれ	27	
たが			
その他		
身(自分をさす)	8	わぎもこ	めざし
つま	5	人の子	ぬし
わがせこ	4	おや	な(汝)
いも	3	ぬしとめ	
おもふどち	3	など各1	

これによっても、古今集の撰者たちが、どれほど「人」という語を好んだかがわかるように思われる。

貫之 22

春の野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ
 などにおける「人」の意味の多様性、それは具体的な人物もしくは風景を、幾重にも屈折させた末に得られる幻影と言えようか。現実が絵になり、絵が歌になるといった経過と同じように(この歌、屏風歌と思われる)。なお、この歌の中の「人」は、「若い女性、複数であるう」というのが、佐伯梅友氏の解釈である。この歌、前記「めざしぬらすな」の歌と対置するとき、現実直叙と現実臙化、東歌と屏風歌、生活者の詩と専門歌人の歌などといった差異から生ずる「美」の二様性をよみとることができる。

ただ集中一つしかない「をとめ」という語は、宗貞の「天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ」の中にある。また、数少ない「子」という語は、

業平とその母との交信、母への「返し」の中に一つある。

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もとなげく人の子のため
 この「人の子」という語は、萬葉集では、「他人の恋人」というほどの意味でかなり多く用いられているが、ここでは、他人の意は消えてむしろ「あなたの子」、もしくはあなたの子という意も消えて「私」を客観視することとなる。

古今集中、先の小野千古の「たらちねの親の守り……」と、この業平の歌とが母子の愛を歌ったものとして好一对をなす。

集中、三語ほどしかない「おもふどち」ということは、若いものどうしの明るい関係を思わすものとして注目に値する。この語、単に恋人どうしという意味をもつだけではない。

春の歌とよめる(一首)

素性

おもふどち春の山べにうち群れてそこともいはぬ旅寝してしが
 思ふどちまとるせる夜は唐錦たたまく惜しきものにぞありける
 一つは自然の中の旅寝の楽しさ、一つは若者が車座して語る夜の一時、現代の若者がする自然の中のキャンピングのような、そんな姿をそこに見ることができる。萬葉集の「よちこ」という語と並んで、人間関係の明朗さをもつことばといえよう。

古今集のもっとも古今集でない部分、すなわち前記「大歌所御歌」の巻の東歌には、次のようなものがある。民謡でなくては表出することのできない素朴さと、それから真の意味での道徳性がある。

甲斐歌

甲斐が嶺を嶺越し山越し吹く風を人にもがもや言づてやらむ

甲斐の白根山を峯こえ山越え吹く風が人だといいなあ、人だ

めざしは、古今集にまぎれこんだ古今集的ならざる語の一つと言えよう。実は、古今集には、子供の実態をうかがうことのできる歌がほとんどない。

物思ひける時、いとけなき子を見てよめる 躬恒

いまさうになに生ひいづらむ竹の子の憂き節しげき 957

よとは知らずや

詞書に、「いとけなき子を見て」とあるが、その見では觀察の謂ではない。物思ひも、いとけなき子も、「竹の子」も「節」も、「よ」も、すべて幻影である。「美」もなく、「生活」もなく、ただ機知があるだけである。こういうところから子供の具体的な影像をひきだすことは不可能である。

「離別歌」の巻には、母と子との別れを詠んだ歌が一首だけある。

小野千古が陸奥国の介にまかりける時に

母のよめる

たらちねの親の守りとあひそふる心ばかりはせきなどどめそ 368

実は、古今集一一一首の中で、「たらちね」という母の枕詞が使用されたのも、この一首だけである。万葉集であれば多用されたのに古今集ではただ一首である。わずかに、母や父の喪中の情趣を詠んだものに次の二首がある。

母が思ひにてよめる 躬恒

神無月時雨に濡るるもみぢ葉はただわび人の袂なりけり 840

父が思ひにてよめる 忠岑

藤衣はつるる糸はわび人の涙の玉の緒とぞなりける 841

喪中の悲哀感も、涙に濡れることは紅葉が時雨に濡れることであり、それはまたわび人（作者自身）の袂が涙に濡れることであるといふ、そういうわざとらしい技巧がすべてを台無しにする、という風に思われる。

古今集が創造した文芸的情趣の世界は、その後の日本文学に大きな影響をもたらしたことは否定できないことであるが、その文芸的虚構が、文芸至上主義の塔にたてこもるわけでもなく、歌合せや屏風歌などで作品の優劣をきそわねばならなかった。言いかえると人間の実態とか、大自然そのものの美しさや厳しさとかから目をそらし、実用社交の具としたところに問題があったといえよう。万葉集に見られた生への歓喜、死別への慟哭などを、情趣的でないやばなものとして抹消した。

こういう考え方は、ことばを下位の概念に細分化してはならない。細分化すればするほどことばは「卑語」と化し情趣にそわなくなるからである。その意味で前記の佳品「めざしぬらすな…」の歌は、はなはだしく古今集的ではない。

ことばをなるべく上位の概念で語ろうとするとき、ことばは対象を臙化するに役立ち、そういうことばは歌を類型化する役目を果たす。古今和歌集の歌に「人」という語の多いことに今さらながら気づかざるを得ないが、それは古今集の「凝視不在」という特性を物語るものともいえよう。

古今集中、人称に関する語いを拾ってみると次のようである。（一一一首、長歌五首を除く。）

同 三年 旅人死。

同 四年 この年の家持作と思われる歌が万葉集にある。家持十三歳。

この年次を認めるならば、家持作歌の素地は筑紫時代に培われていたというべきであろう。そのころ彼は、父旅人、叔母坂上郎女、そして資人つかひびとの中の心利きたるものの作を鋭敏に聴き取り、また記録することを怠らなかつたにちがいない。さらに、父旅人と交渉の深かつた異質の詩人憶良からも多くのものを吸収したはずである。

このころ、「朝廷の公の日記はあつたらしいが、続日本紀に吸収されてしまつて、今日には伝わらない。私的な日記は、一般につける習慣も能力もなかつたようである。万葉を大伴家持の歌日記とみればみられないこともないけれども……云々」——青木和夫——という、その歌の創作、蒐集、選択、編集などについての家持の意欲と能力とはその幼年期、筑紫の国にいたことが源泉となつていと考えられる。もしも都にばかりいたら、あの防人の歌も東歌も選びとる能力を家持も持ち得なかつたのではなからうか。防人の歌の詞書の所々に、「——
が進たてまつれる歌数は十七首なり。但し拙劣なる歌のみは取り載せず」とあるのは、撰者の見識が見えて貴重である。

家持年少の作三首を次にあげる。

鶯の歌

うち霧らし雪は降りつつしかすがに吾家の園に鶯鳴くも

初月の歌

振かり仰けて若月見れば一目見し人の眉まゆび引思ほゆるかな

坂上家の大嬢女おほいらつめに贈る歌

吾が屋外やどに蒔まきし瞿麦くわむぎいつしかも花に咲きなむ擬へつつ見む

——共に十三・四歳ころ——

武門の家の子であつたはずの大伴家持が、実はここでは、文学の道の早教育を受けていたことになる。

そのおかげで日本人は万葉集を得た。

二、古今和歌集の素朴な一面

古今和歌集卷二十、東歌の中に

さがみうた

こよろぎの磯立ちならし磯菜いそなつむめめざし濡らすな沖うきに居れ波がある。

1094

こよろぎの磯を行き来し

磯菜いそな摘むをとめを

波よ 濡らすな

沖にとどまれ

といったおもむきのものである。浜で働く少女への愛情が素朴に表現されている。「めざし」ということばが眼目と思われるが、額髪が目に触れるほど垂れている少女の姿形が鮮明に伝わってくる。この歌、「風俗歌」にもあり、そこではこの呼びかけに答えるめざしの歌が添えられている。

濡ろ濡ろも 君が食おすべき 食おすべき菜をし摘み 摘みてば

海辺の地方色ゆたかな風景であると同時に、そのころの少女の働き様をかいま見る思いがする。

1448

父母を 見れば尊し 妻子見れば めぐし愛し 世の中は かく
ぞことわり…… 800

至極の大聖すら尚し子を愛しふる心あり。 況むや世間の蒼生
の、誰かは子を愛しびずあらめや。 序 802

憶良には、こうしたオーソドックスな観念論と、次のような非常に
現代風なりアリスティックな発想の詞句とを対立させ照応させるとい
った手法が多く見られる。

瓜食めば 子ども思ほゆ 粟食みば まして憊はゆ 何処より
来りしものぞ まなかひに もとなかかりて 安眠し寝さぬ 802

とか、「貧窮問答歌」の、
風雑へ 雨降る夜の 雨雑へ 雪降る夜は 術もなく 寒くしあ
れば…… 892

といった冒頭の対句や、同じ歌の、
……直土に 藁解き敷きて 父母は 枕の方に 妻子どもは 後
の方に かこみゐて 憂へさまよひ かまどには 火気吹きたて
ず…… 892

などといった無残なデテールは、憶良の知識人的イメージとは全く対蹠
的なものと思わざるを得ないが、憶良の胸中には、いつもこうした二
つの心的傾向が揺れていたのではなからうか。中国的教養とやまとご
ころと、ロマンチズムとリアリズムと、国守の責任感と詩魂と、そ
うした対立をむしろ歌の中で激突させていたのではなからうか。

憶良が筑前守として赴任したのは神亀五年（七二八）。時に六十
九歳か。太宰師大伴旅人は四歳とし下。高木市之助氏は、この二人
の詩人の筑紫における邂逅を、「日本文学史上至って特異な事件」と

し。

○貴族の大宮人的かつ共感的浪漫的な旅人の詩心

○民族的大乗的かつは孤独的現実的な憶良の詩心

を対置し、両者の関係の中にある照応と反澆を指摘する。

憶良は自己の内部にも相対立する両極をもち、外部にも旅人という
対立する存在をもたねばならなかった。

夜光る玉というとも酒飲みて情をやるにあにしかめやも 旅人 346
しろがねもくがねも玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも

ここには措辞の類似性と、思想の対蹠性がある。そして旅人の主情
的な享楽主義と憶良の生活主義とは截然と反澆しあう。

默然をりて賢しらするは酒飲みて酔泣するになほ若かずけり 旅人 350

憶良らは今は罷らむ子泣くらむそを負ふ母も吾を待つらむそ 憶良 337

酔泣きする旅人と、遊宴の座を立て「家」に帰る憶良との対比は
興味深いものであるが、小稿ではここに生じたもう一つの事件、すな
わちそのころここで育ったはずの幼い大伴家持について、視点を移さ
なければならぬ。

筑紫における旅人と憶良の相互関係は、そこにいわゆる「筑紫歌
壇」と称せられる詩的気運を盛りあげさせたが、その中に幼年の家持
が成長し続けていたことに、旅人、憶良の邂逅よりもっと大きな文学
史的意義を認めざるを得ない。

天平二年 旅人帰京、その時家持十歳。（七三〇）

人の少女たちに向って、「にほひよる子らが同年輩」と呼びかけているが、同年輩の友だち関係を示唆することばとして興味深い。

その外、前掲の語彙一覧の中の比較的特異な語の用例をあげると次のようである。

勝鹿の真間娘子を詠む歌

……勝鹿の 真間の手児奈が 麻衣に青衿着け 直さ麻を 裳に
は織り着て 髪だにも かきは梳らず くつをだに 穿かず行け
ども 錦綾の 中につつめる 斎児も 妹に如かめや……

粗末な身なりをしてい葛飾の真間の手古奈の方が、錦や綾の中に包まれて「いつき児」よりも美しいということを言っているのであるが、この「いつき児」の意は、神をいつきまつるようにたいせつに育てている子のこと、ここでは粉飾より実質がたいせつという思想をよみとることができる。

卷十四、東歌の中の一節。

都武習野に鈴が音聞こゆ上志太の殿の仲子し鷹狩すらしも 3438

この中の「仲子」は、いわゆる次男坊である。東国のどこかの殿の次男坊が鈴の音を高らかにひびかせながら駆けて行く、その奔放な遊びぶりが思いやられる。その次男坊を想うひとりの少女が詠んだ歌という説もあるが、この歌の印象からいうと、そうしたひそやかなものではなく、もっと明るい、野性的な若者の姿を詠み伝えたものと解したい。この歌の注に、

或る本の歌に曰く、美都賀野に。

又曰はく、若子し。

とある。それによれば、

美都賀野に鈴が音聞こゆ上志太の殿の若子し鷹狩すらしも

となるわけであるが、「美都賀野」はともかく、第四句の「若子」は、「仲子」でなければならぬ。「若子」では一首にある個性をいぢるしく減殺させてしまう。

「たわやめ」は、いわゆる緑女のみをさすことばではないが、大伴坂上郎女の歌に、

……嘆けども しるしを無み 思へども たづきを知らに たわ
やめと 言はくもしるく たわらはの ねのみ泣きつつ たもと
ほり 君が使いを 待ちやかねてむ 619

といった例がある。「世にたわやめという、全くその通り、子供のように泣いてばかりいて……」というほどの、待つかいの無さを幼な子の無力さにたとえたものである。

「わらは」という語は、このころまで「わらは髪」という有形の語と密着していたようで、こどもという抽象的な意味より先に、その髪形が印象され、歌に新鮮な感覚を付与する。

卷七、施頭歌、人麿歌集の中の一節、

この岡に 草刈るわらは
しかな刈りそね
在りつつも 君が来まさば
御馬草にせむ

1291

には、「そんなにみんな草を刈ってしまわないで」と見知らぬ女から言われて、振り向くわらわ髪の子が鮮明にイメージ化されている。さて、山上憶良の「思子等歌」に触れなければならぬが、ここにいたるとそれはもう語彙の問題にとどまらず思想にかかわってくる。

に、乳を求めてやまぬ「みどりこ」のイメージを以てした。

なお、正倉院文書のなかにある八世紀初頭の戸籍などの断簡によると、このころ実施した人口調査の年令別区分けに、「緑児りよくし」、「緑女りよくしよ」の文字があり、三歳以下の幼児に対してその呼び名を使っている。やまとことばの「みどりこ」にこの文字をあてたものようである。また、奴婢の子に対しては、三歳以下の幼児を緑奴、緑婢などと記している。松の緑、若葉の擬辞という美しいイメージをせおった「みどりこ」も、ここでは単なる符号と化する。

大宝令(七〇二年施行)

年少者のよび名

歳	性別	男	女
一〜三	緑	児	緑女
四〜十六	小	子	小女
一七〜二〇	少	丁	少女・次女

大宝二年(七〇二年)戸籍による子供の人口

美濃 春部 栗栖 同 同 半	濃 里 太 里 布 里	人					口	
		緑児	緑女	小子	小女	子供計	総人口	
三九	二八	九〇	一一〇	二六七	六五四			
一〇	三七	六一	九四	二〇二	四四七			
六四	六二	一九一	一六三	四八〇	一、〇八四			

日本子どもの歴史・久木幸男編による

巻十六、「昔老翁ありき。号を竹取の翁と曰ひき……云々」の神仙

物語には、幼児成長の過程が、幼児の着る衣服の種々相とからみあわせて華麗に物語られている。

緑子みどりこの 若子わくこが身には たらちし 母に懐かえ 襁ひつぎの 這ふ子わらふこが身には 木綿ゆふ肩衣かたぎぬ 被裏ひわらに縫ぬいひ着 頸着くびつきの 童児わらわが身には 次つぎの 袖着衣そでぎぬ 着しわれを にほひよる 子らが同年輩とねいには 蛸たぬの腸わた か黒し髪を ま櫛かみもち ここにかき垂り 取り束ね 挙げても纏まときみ 解とき乱れ 童児わらわに成なしみ さ丹につかふ 色いろなつかしきむらさきの 大綾おほなやの衣……

「子」という語の概念は広いので、その子の着る衣服や髪形でもってイメージを限定していくといった操作が、この歌の中で試みられている。

- 「みどりこ」と呼ばれるころ、
——母に抱かれ、
- 「這ふ子」のころ、
——むつきをし、木綿の袖無しを着、
- 「わらは髪」のころ、
——絞り染の袖のついた着物を着、
- 成長して黒髪をたらしたり、つかねたりなどするころ
——薄絹の丹色に染めた着物や、紫色に染めた大綾織の着物：
……などを重ね着にして、

といった具合である。(史家によると、このころの民衆の衣服の材料は麻とか粗製の絹であったという。この歌に見る服装の豪華さには文飾があると思わねばならない。)

この歌の中の「子らが同年輩」という語は注目値する。老翁が九

万葉集の中の「こども」に関する語彙

子

みどりこ・みどりご (緑子) わらは (童子) たわらは (手童)
 こ (子) こら (子等) こども (子等) てご (手児)
 あご (吾子) まなご (愛子) めづこ (愛づ兒) わがこのとじ
 いはひご (斎ひ兒) よちこ (同輩子) なかち (仲子)
 たわやめ (幼婦, 手弱女) をみなわらは (女童兒) をとめ (少女)
 うなるはなり (童兒放髪)

母・父

ちち (父) ちちぎみ (父君)
 おも (母) はは (母) ははとじ うつくしはは (愛し母)
 おもちち (母父) ちちはは (父母) おや (親・祖)

枕詞

たらちねの… (母) たらちしの… (母)
 ちちの実の… (父)
 子らが手を… (巻く, 纏く)
 泣く子なす… (慕ふ, 探る…)

………緑児の 泣くをも置きて 朝霧の おぼになりつつ 山城
 の 相樂山の 山の際に 往き過ぎぬれば 言はむすべ せむす
 べ知らに 吾妹子と さねしつま屋に 朝には 出で立ち偲び 夕
 には 入りの嘆かひ わき挟む 児の泣くごとに 男じもの 負
 いみ抱きみ 朝鳥の 音のみ泣きつつ 恋ふれども 験を無み
 と………

481

二首共に父性の匂いの強い作品であるが、歌中の「みどりこ」のイメージは、男親の周辺を這いまわり、「音のみ泣く」存在として読むものに迫ってくる。そして、それは妻を亡くした男の慟哭と重なる。この二つの歌にある「男じもの」ということばは、妻が形見に置いていったみどりごを、あるいは「腋はさみ」、あるいは「負ひみ抱きみ」する男親の困惑を的確に表現する。それは「男タルモノ……」、「男ナノニ……」といったニュアンスを持ちながら、妻への哀傷と子への愛憐の心を交錯させる。

「みどりこ」については、倭訓栞には、「穉弱ニテ松ノミドリナドノ如キヲ云フナルベシ」とあり、嬰児の美称だったとされている。美称であるがゆえに、その語感に一種の甘さが漂う。それであるのに、これら挽歌の中に位置づけられたその語の、なんと生々しく現実的であることが。

大伴家持の青年時代の作、「みまかりしをみなめ」をいたむ短歌、時はしも何時もあらむを情いたく去にし吾妹かみどりこを置きて

467

も同様の趣きがある。「みどりこ」がその後、若葉の新鮮さとは別れ、悲劇的要素を多分に含むようになったのは、このころの挽歌にことうしたイメージをもって多用されたせいではなからうか。

卷十八、家持の雨乞の歌、そこにも「みどりこ」の語がある。

………雨降らず 日の重なれば 植ゑし田も 蒔きし畠も 朝ご
 とに 濁み枯れ行く そを見れば 心を痛み 弥騰里児の 乳乞
 ふごとく 天つ水 仰ぎてぞ待つ………

では、その高い格調のなかで、天を仰いで雨を待つ人々を描写する

4122

古典のなかの「こども」

— 児童文学の視点から

野田 満

- 一 万葉集のなかの「こども」に関する語彙
- 二 古今和歌集の素朴な一面
- 三 土佐日記のなかの幼童の歌
- 四 童心回帰

一、万葉集のなかの「こども」に関する語彙

人麿の歌に、路上に伏す見知らぬ旅人の屍を見て詠んだ長歌がある。当時の人々がこの世に生を享けることの意義をどのように考えていたかを物語るかのように、人麿は死者の霊に呼びかける。

……波の音の 繁き浜辺を しまたへの 枕になして 荒床に
ころふす君が 家知らば 行きても告げむ 妻知らば 来も問は
ましを 玉ぼこの 道だに知らず おぼぼしく 待ちか恋ふらむ
愛しき妻らは

220

浜辺の荒床にまろびふす死者の魂をなぐさめるものが、その家郷への道であり、愛する妻であるとするならば、当時を生きる人々の生活の核も、やはり家と、そこに在る妻とであったこととなる。

卷十三、挽歌、伝誦歌風のもので、人麿歌と同種のものに、

……いさな取り 海の浜辺に うらもなく 宿れる人は 母父
に 愛子にかあらむ 若草の 妻かありけむ おもほしき 言つ
てむやと 家問へば 家をも告らず 名を問へど 名だにも告ら
ず 泣く兒なす 言だに問はず 思へども 悲しきものは よの
なかにあり よのなかにあり
がある。ここでも作者は屍に呼びかけている。
父母にとつてかけがえのないとし子であつたらうに、かわいい妻
が待っていたであらうに、
それなのに、あなたは、
家を聞いても語らず、名を聞いても名のらず、泣く子のようにもの
も言わず……………

3336

と。死者への鎮魂は実は鎮魂歌をうたう側の魂を鎮めることなのである。こういう歌群のなかには、小稿のテーマの「こども」にかかわるものは少くない。「子」ということばが当時の生々しい生活を背負って随所にたちあらわれる。

万葉集中の歌の中で、「みどりこ」という語は、どんなイメージを背負って用いられていたか、それを一瞥してみると、まず人麿の「妻死みまがりし後、泣血哀慟して作る歌」の一部。

……吾妹子が 形見に置ける みどり兒の 乞ひ泣くごとに
取り与ふる 物し無ければ 男じもの 腋はさみ持ち 吾妹子と
と 二人わが宿し 枕づく つま屋の内に 昼はも うらさび暮
し 夜はも 息づき明し……………

210

あるいは卷三、挽歌の中の、高橋朝臣の「死みまがりし妻を悲傷かなしびて」作る歌、